

第33期鍼灸臨床研修会を受講して

一步堂こくぶん鍼灸院 国分俊明

今回、9月14日から16日にかけて開催された日本鍼灸師会第33期鍼灸臨床研修会を受講してきました。大変勉強になる内容で今後の鍼灸臨床に活かしていきたいと思いました。愛知県鍼灸専門師会の皆様、講師をしてくださった日本鍼灸師会臨床研修会の皆様に改めて感謝申し上げます。3日間の研修会を通しての感想を報告させていただきます。

「凡事徹底」と「積小為大」

研修会の冒頭、研修委員長の稲井一吉先生から二つの四文字熟語についてのお話がありました。①は「凡事徹底」という言葉で、「簡単な事でもしっかりと継続してやる事。」、②は二宮尊徳の「積小為大」という言葉で、「小さな事でも積み重ねると偉大になる。」の二つでした。この二つの熟語には深い意味がありますが、私なりの解釈を述べてみたいと思います。この二つの言葉の合わせ持つ意味は「簡単で小さな事でも、積み重ねることが大切である。」という意味だと考えました。そして、私たちの診療に具体的に活かすのであれば、簡単で小さな事、例えば、①会話のキャッチボールにより患者の情報収集を行う事。②古典的診察法を含む徒手検査法をしっかり行う事。更には、③痛みの少ない刺鍼及び程良い熱さのお灸を行う事。④医療機関との共通言語によりカルテを記載する事。或は、紹介状（患者情報提供書）を記載する事。⑤鍼灸不適応と鑑別した患者さんは紹介状を添えて医療機関に紹介する事。⑥症例報告や学会発表を積極的に行う事。等々、簡単で小さな事を繰り返し実践していく事だと解釈しました。

「会話のキャッチボール」

そこで、この六つの項目のうちで、①の「会話のキャッチボールにより患者の情報収集を行う。」について少し述べてみたいと思います。

患者さんと会話のキャッチボールをする事により、(1)患者さんの満足度が上がる。(2)患者さんとの信頼関係が構築できる。(3)多くの情報が得られ鍼灸の適応不適応の判断ができる。(4)診断がより正確になる。以上の事がスムーズに展開できるようになります。また、会話のキャッチボールにより病歴を聴取する事は非常に重要だと言う事もわかりました。稲井先生のお話によると病歴聴取により診断確率は80%へとアップするそうです。また、臨床研の講師の先生方が繰り返し強調されていたのは「特に大切なのは現病歴です。症例報告等においては現病歴をしっかりと記載してください。」との事でした。

「傾聴と共感」

医療面接法の中に傾聴及びオウム返しという言葉があります。傾聴とは「ただひたすら聴く事。」オウム返しとは「患者さんの述べた言葉に対し同じ言葉で返していく事で、患者さんに共感する事、そして共感していることを患者さんに伝えていく事」なのです。要約すると「どんなに忙しい時でも患者さんに集中し、患者さんの声に耳を傾け、共感をする。」という事でした。

「インプット情報とアウトプット」

理想の鍼灸師になるには、かなりの努力を必要とするとは思いますが、根気強く傾聴などの練習をおこない、理想の鍼灸師となるべく努力をしていきたいと思えます。

問診や徒手検査等はインプット情報です。これらのインプット情報を、治療やカルテ記載、患者情報提供書、症例報告及び学会発表等にアウトプットしていく。この様に、インプット情報を如何に集め、その情報をアウトプットして治療に活かしていくか、という事が重要な事だと感じました。どうしても鍼灸の治療だけに目がゆきそうな自分を反省するとともに、患者さんのインプット情報を、治療にフィードバックさせ、より安全安心な鍼灸となるよう、努力していきたいと思っています。

「最後に」

最後に臨床研の懇親会の席上で、稲井先生から国分に「患者さんを病院に紹介してはいますか？、患者さんに紹介状を添えて医療機関に紹介してみるといいですよ。」との助言を頂きました。この助言を実現できるかどうかはひとえに国分の努力にかかっていると思えます。そして、患者さんの病態を鑑別して、鍼灸が適応か不適応かの判断をし、必要ならば患者さんを医療機関に紹介できる、鑑別能力を備えた鍼灸師を目指したいと思えます。まずは、臨床研の審査に合格し、平成26年度に開催される日本鍼灸師会全国大会の岐阜大会で発表できる様に努力していく決意です。

感謝